

【会場参加型セッション】 2009年6月24日

\* 当日会場からの質問にお答えいただいた方

小平市立小平第二中学校学校支援コーディネーター 布 昭子 様  
生涯学習政策局社会教育課地域・学校支援推進室長 佐藤 弘毅 様  
北海道帯広市教育委員会学校教育部 教育研究所 所長 早川 一之 様  
文京区立柳町小学校 校長 秋山 明美 様

\* モデレーター

USEC 理事 教育・研究担当 平林 慶史

---

Q.コーディネーターの設置について、新潟市では100人、新宿区では全校配置と言う事を聞き、大変驚いております。人探しのポイントを教えてください。

A.帯広市 早川 一之 氏

各学校の実情に合わせたコーディネーターさんを選ぶために、様々な方面に声かけをしています。基本的には学校のほうでコーディネーターを選んでもらうようにしています。

例えば帯広市では、平成19年度にモデル校として2校がスタートしました。学校現場と地域の双方を良く知っている方という要望があり、この年は退職校長をコーディネーターに依頼しました。次年度の平成20年度では、本市独自のモデル事業と合わせ全11校となりました。その際には、退職校長の他にもPTAや放課後の子ども支援に関わっていた方をお願いしていた地区もあるようです。

Q.退職された校長先生がコーディネーターをやると言うのは、学校としては、どんなメリットデメリットがありますでしょうか。

A.文京区 秋山 明美 氏

現職の校長としては、退職校長が来るのは、やりづらいところはあると思います。やはり地域の人と共に、学校で子ども教育をしてきた経験のある人が最初に来て下さって、そこから少しずつ地域に広まっていくと良いのではないのでしょうか。

Q.小平二中は複数のコーディネーターさんがいらっしゃるそうですが、リーダーシップを取る人や代表になるような方はいらっしゃいますか？

A.小平市 布 明子 氏

小平市では、各校に二名の世話人という人を立てており、学校側との窓口になっています。コーディネーターが2人のところや、10人いるところもあって、実情によりけりですが、世話人がリーダー的な存在となっていますね。

Q.一校に複数名のコーディネーターがいて、報酬を支払うということについては、実際の予算の運用上はどのように考えればよいのでしょうか？

A.文科省 佐藤 弘毅 氏

コーディネーターの方には、謝金をお支払いする事になっております。予算の大半が謝金に充てられると思いますので、それぞれの地域の実情にあわせて、予算の中でやっていただければと思います。

**Q.学校現場はあまり余裕がない状態の中で、学校のニーズをどのように明らかにして、地域に提示するのか。**

A.帯広市 早川 一之 氏

帯広市では、学校教員や地域の方をお呼びして、文科省の事業として事業報告会を行ない、その中で具体的な取り組みの話をいたしました。いざ本部を立ち上げよう、という時に手を挙げてくださったのは、すでに同じような取り組み（クラブ活動の支援や朝の防犯活動などを地域の方と共に行なっている）をしている学校や地域でした。

そうしたところを中心に、事業の活用について話していく中で、少しずつ学校側のニーズが見えてきた印象です。

**Q.学校側からニーズを提示する方向と、それとも地域側からお手伝いしましょうと声かけをしていく方向と、どちらが学校側としてもやりやすいのでしょうか。**

A.文京区 秋山 明美 氏

学校側がニーズを提示したほうがやりやすいと思います。理由としては、まず学校には校長が中心となって経営方針を立てますので、そこに地域との連携などの方針があるかどうかポイントです。その方針がなければ、周りが良かれと思っていても学校の動きは鈍いですし、校長が妥協しても現場の教員は自覚を持ってないでしょう。

学校で今やっていることを見直して、やれるところからトライするのが現実的だと思います。例えば柳町小では、「いつでもどこでもボランティア」という名称で、交通安全や読み聞かせのボランティアをやって頂いています。学校に1番近い地域の方というのは保護者ですので、1年、2年と経つうちに大きな地域の集まりになるという考えでやっています。

**Q.コーディネーター側がニーズを汲み取っていくには、どうしたらよいのでしょうか。**

A.小平市 布 昭子 氏

私どもは支援するにあたって、条件が揃わないときは「学校のニーズを断る勇気を持つ」とことを決めてあります。人が集まらない・準備ができないときに支援をしても、お互いにも子どもにとっても中途半端になってしまいますから。

ただ、ニーズを提示してくださるのは、とても嬉しいことです。それに近い形で支援したり、次の学期や来年度に行なえるように、コーディネーターが準備をして先生方と話し合っていくということをしていけば、学校のニーズを無駄にすることははないのではないかと思います。

思いが走りすぎて空回りしてしまうと、良い支援にはなりにくいですので、そうした落ち着いた対処も大事なのではないかと思います。

**Q.コーディネーターやボランティアの方で、長期間、関わっていると大変な時期もあったのではないかと思います。そんな時期をどのように乗り越えられたのでしょうか。**

A.小平市 布 昭子 氏

もちろん、大変な時期もありました。その中でも、やる気を長続きさせるコツは「小さなことでも1つ1つ形にする」とことだと思います。自分たちが関わったことが形になり、子どもがこんな風になって来た・先生方に感謝してもらえたという実感が大切ですね。

当初は手探りでしたが、学校の先生方と授業の進め方や教材について、意見交換をしていくことで、良い授業ができたということが1つ出来てくると、それを土台として次の提案もできますし仲間の輪も広がります。

**Q.学校とコーディネーターの関係は仲良しですか。コーディネーターが学校に受入れられる前の苦労どんなことがあったのか、その工夫が知りたい。**

A.文京区 秋山 明美 氏

仲良しですし、仲良しでなければ子どものためにも良くないと思います。心がけているのは、挨拶をきちんとして顔を会わせることです。そういったコミュニケーションをしっかりと取るのが大切ですね。学校と保護者と地域の3者が仲良しになればなるほど、学校や地域、家庭それぞれの教育力は上がる実感があります。

**Q.ボランティアやコーディネーターの方が、主に活動される場所の位置について、伺いたい。職員室や校長室に近いなど、留意している点はあるか。**

A.文京区 秋山 明美 氏

質問については、ボランティアやコーディネーターの方が活動しやすい環境づくりを聞かれていると理解しました。本校では、学校に来客がいらっしゃれば校長室や職員室からも分かりますから、気軽に話ができます。学校のほうから関係性を積極的に築いていくことは大切なポイントです。

付け加えると、重要なポイントは校長や管理職が学校の経営方針をしっかりと持っていることだと思います。その経営方針を職員にもコーディネーターさんにも一貫して伝えていけば、学校も地域も活動しやすいのではと思います。

**Q.コーディネーターの側から、先生方と信頼関係を築いていくにあたって気をつけた点は何でしょうか。**

A.小平市 布 昭子 氏

まずは、学校の事業サイクルに合わせることでしょうか。学校は秋に来年度のスケジュールを作り始めるので、その時に来年度の話を持ち合わせます。先ほど秋山校長も仰っていましたが、管理職の方針によってガラリと計画が変わることも少なくないので、人事異動の影響で計画が崩れないように準備をしています。

次のポイントは、こまめに笑顔で挨拶をすることでしょうか。これをきっかけに、話ができるようになってきます。

3つ目は、学校と一緒にルールを決めて、それを守ること。支援に関わると、個人情報を含め様々なことを知ることになります。外部の人に言っても大丈夫なこととダメなことを区分して、必ず守るということも信頼関係の構築につながります。

細かいことはいくつでもあげられますが、まとめれば「学校の文化を知って、パートナーとして関わるためのルールを守る」ことに尽きると思います。

**Q.管理職が動いてくれないとコーディネーターは開店休業中になってしまいます。どうやって管理職の先生を説得して行けばよいのでしょうか。**

A. 帯広市 早川 一之 様

この事業は、校長のリーダーシップが一番のカギを握ると認識しています。ですので、校長先生には丁寧にお話をして、校長が先頭に立って学校でコーディネーターを選んでもらうことにしています。ご質問されたようなことは、当方ではないのかなと思っております。

まだ事業の趣旨を理解して頂けない場合もありますが、ひとつひとつ丁寧に粘り強くお話をしていくことは当方では可能ですので、話し合いを続けたいと思っております。

**Q.コーディネーターが、なにか困ったときのために、相談や打ち合わせができるような窓口や、行政の担当の職員がいるといったことはありますか？**

A.帯広市 早川 一之 氏

ほぼ学校が主体でやっているのですが、窓口はありません。帯広市としては、昨年度は4回、コーディネーターの養

成研修は行ないました。その中で、挨拶をして意見交換をするということはやっています。

Q.春日市の事例で言う、学校教育部というところは、コーディネーターが行けば相談に乗ってもらえるのでしょうか。

A.春日市 工藤 一徳 氏

春日市の場合は、学校支援地域本部事業は直接やっていないので、コーディネーターもおりません。もちろん、それに相当する者はおります。春日市はコミュニティスクールの形態を取っていて、各学校で学校協議会を組織しています。地域の代表、PTA・保護者代表と学校代表が参加しています。ここに、学校教育部と社会教育部の職員が入っていて、月に一度、欠かさずに会議をしていますので、相談がある場合はこの場でも対応しています。

Q.土曜日の活動に学校の教室を利用されているという事例が多く見られたが、この場合学校の先生達も学校を開けに来てくださるのか。そうだとすると先生の仕事が増えてしまうのではないか。また、地域社会のみで活動を行っている場合は、学校内の安全管理について誰がどう責任を取るのか。

A.文京区 秋山 明美 氏

文京区では、天神小学校の事例のように宿泊を伴う行事を、土曜・休業日に学校で行うというのは難しいでしょう。ただ、本校の場合には、何かの活動のときには、人がついております。例えば、夜間は人材派遣センターから派遣されている管理人があけます。そこでPTAが活動し、何か事故があったら、そこはPTA会長が責任を持ち、PTAの保険でやっていくと言うふうに線引きし、お互い了解しております。後で困らないように、きちんと線引きをしてお互いの了解を取るのも大事なことです。

Q.コーディネーターの方は、学校にはどれくらいの頻度で、言ってもらえるのですか。また、仕事を持っている人はコーディネーターとして働くのは難しいでしょうか。

A.小平市 布 昭子 氏

夕方を中心に、週3・4回は学校に行きます。夕方に行くのは2つ理由があり、1つは先生方のご都合です。授業がある時間帯はゆっくり話ができませので、夕方の時間帯で先生方と事前に調整をしています。もう1つは、コーディネーター側の都合です。働いている人も多いので、夕方や夜のほうが時間の調整がしやすいのです。やはり、お互いが顔と顔を合わせてコミュニケーションを取ることが一番効率のよいことですから。こうした工夫があると、働きながらもコーディネーターとして関わるのは、難しくないとだと思います。

A.新宿区 大和 涼子 氏

私は週4回ほど学校に行っており、フルタイムではありませんが仕事もしております。自分の空いている時間と、学校の時間をうまく調整すれば両立できますし、私もそうしています。

学校では、月曜日に3時間ほど授業をしている他に、私が調整を担当したゲストティーチャーが来る場合やPTAとの打ち合わせには出勤するようにしております。学校との打ち合わせは先生方のご都合が最優先ですので、多少は自分の仕事に響くことはありますが、両立できないほどではありません。

A.美咲町 飯田 純子 氏

学校との契約は、週に10時間の勤務という契約になっておりますので、その時間は確保して学校に行くようにしております。週に3,4回ほどでしょうか。他校のコーディネーター同士、また学校の教職員の方と私どもコーディネーターの打ち合わせをしております。

A.帯広市 早川 一之 氏

コーディネーターの方には養成研修にも出て来てくださいますが、こちらでも皆さん仕事をお持ちであるということは重々承知しております。依頼する校長先生のほうでも、お忙しいところ申し訳ないのですが、という形で夕方に来て頂いていることもあるようです。

A.文部科学省 佐藤 弘毅 氏

文科省としては、あくまでも予算をかけるための試算として、一日何時間・週何日かという形で予算を毎年決めております。コーディネーターが1人のところもあれば、複数のところもありますし、時間もそれぞれでしょう。それぞれの地域の実情に合わせてやっていただいております。仕事以上によくやって頂いている方も多くて、感謝しています。

確かに、時間を拘束される仕事に就いていらっしゃる方など、難しいところもあるかと思えます。とはいえ、その中でも実際にやっていらっしゃる所もありますので、だから不可能だということでもないでしょう。学校とコーディネーターの方で調整するなど、工夫をしていくということになってくるのではないのでしょうか。

**Q.今年度から市全体で地域本部事業に取り組んでいる。教育委員会として活動していくにあたり、七つに分けたブロックの活動を充実させていくために、どんなふうに関わって行けば良いのか。**

A.小平市 布 昭子 氏

コーディネーターの立場としては、ハードの面でもソフトの面でも、コーディネーターやボランティアの居場所を整備してほしいと思います。ハード面でいえば、学校に来たときに作業できる部屋や用具（電話や Fax・コピー機など）を準備していただくと助かります。ソフト面の居場所というのは、例えばコーディネーターさんを PTA 総会や学校評議員会などの際に紹介していただくことであったり、学校の先生のみならず事務職員・用務員さんにも事業やコーディネーターの紹介をしてもらうということです。そうした居場所づくりのサポートを、行政の方には行なっていただければと思います。

支援の内容面でいくと、例えば中学のキャリア教育支援は、学校と地域の両者がリンクする必要があります。その際には、学校教育課や生涯学習課といった行政間の壁をなるべく低くできるようにお願いしたいと思います。

**Q.学校のスペースの限られている中で、ボランティアやコーディネーターの方が立ち入り可能/禁止な場所という線引きはされているのでしょうか？**

A.文京区 秋山 明美 氏

特別に線引きはしておりません。

本校の場合、集まれるのは図書室が多いです。また、PTA 室に小会議室があって、そこにパソコンと印刷機がありますので、そこも使っていらっしゃいます。図書室・小会議室と職員室の行き来で、たいいていの用事は済むかと思えます。

**Q.ボランティアの方にとって、居心地が良い・気軽に通いやすい場所というのは、どんなポイントがあるのでしょうか？**

A.小平市 十三小学校 コーディネーター 寺田 氏

とても難しい質問ですが、「そこに来れば何かがある、安心できる」という空間だというのがポイントだと思います。もちろん支援本部のお仕事もありますが、その合間に、事業の成果について報告しあったり、情報交換ができるというところで、足を運んでいるのかなと思います。もちろん、長い間やっていますので、先生方との関係がつかれていて、かつコーディネーター同士も数年の経験があるということも、空間を保つ安心感につながっていると思います。

Q.学校支援地域本部事業が完了するのが、平成 22 年度。これが終わった後、学校や地域は、これまでに比べて、何がどうなっていれば良いのか。さらにこれをどうやって続けられれば良いのか。

A.文京区 秋山 明美 氏

文京区と話し合ってみると、区内の全学校でやっていきたい・国の事業が終わっても何らかの形で存続させたいということでした。私は、この事業は地域のものだと考えていますので、学校の校長が変わっても、地域が主体となって続いていくというのが理想ではないのかと思います。

本校の場合、もともと学校ボランティアとして立ち上げたものを今年度の本部事業に引き継いだという経緯ですので、現在は学校とコーディネーター主導でやっています。学校主導から、少しずつ地域主導へとバトンタッチしていく形でやっていきたいと考えています。それにあたって、学校支援の中に、スクールガードや放課後子ども支援など様々な事業がありますので、それを精査した上で地域に引き継いでいければと思っています。

A.帯広市 早川 一之 氏

最終的には、市内の全ての学校で行なうという計画にしております。昨年度からの 3 年間の中で、各学校での必要な予算を明らかにして、市として事業が継続可能なのかを判断しますが、息の長い活動にしたいと思っています。

A.文部科学省 佐藤 弘毅 氏

この 3 年で完成形ができるものではなく、むしろスタート地点に立つというイメージで降ります。

学校を地域で支える、町づくりを全体で盛り立てていくような取り組みの出発点になる事業だと考えています。ですので、この三年間の中で、人材の発掘や仕組みの基盤づくりを、行って欲しいと思っています。

3 年を過ぎても、3 分の 1 補助事業という形で国が補助する方向であります。条件整備をしていくのが行政の役割かと思っていますので、成果をあげた事例など、たくさんの声をお寄せいただいて本部事業のサポートができればと思っています。

A.小平市 布 昭子 氏

8 年間を振り返ると、継続するにあたっての課題は大きく 2 つありました。

1 つは、モデル事業が終わった後の予算はどうなるのか、という点でした。小平市の場合は東京都のモデル事業としてスタートしましたが、この後はどうなるのかという不安でした。結果として、小平市の単独事業として採択され、再度東京都のプラットホーム事業のモデル地区に指定され、支援本部事業へと継続して来ましたが、財政面での不安はあります。

もう 1 つの課題は、人材を継続して発掘するにはどうするかという点でした。小平市の場合は、PTA との連携を通じて、子育て中の親御さんが求めているものを知り、そして手を取り合っていくことができました。

1 つ 1 つの失敗はもちろんありますが、子どもたちのためにこれをやろうとって、たくさんの地域の人たちが頑張ってきて、そこに行政が支援をして、先生方もやる気を見せてくれたという、様々な力が重なりあって来たものです。今後もそれを続けていければと思っています。

USEC 理事 教育・研究担当 平林 慶史

昨年まではこの USEC のシンポジウムでは、継続できる仕組みを作るのが大事なのではないかと思っていました。ただ、こうしてお話を伺っていると、「この人だからこそ」という属人性に頼っても良いのではないかと思うようになりました。こんなコーディネーターや、あの校長先生だからこそ、という部分が、どうしても排除できないと感じています。こういう営みに参加して、子ども達のために何かを行い、成功体験を得たという実感があれば、それは 1 つの本部事業での成果なのではないかと思っています。